

Kくんと私の一年(上)

～ 非言語性LD児の記録～

植田 敦子

一 最初の出会い

私がKくんに最初出会ったのは、昭和も終わろうとしている年の秋、就学時健康診断にてであった。

「億万点取る、億万点取る！」

と叫んで知能テストの教室に入って来た。彼を見て、私と先輩のN先生は苦虫をかみつぶしたような顔で見つめ合った。知能テストは十人ひと組で行われていた。他の子どもへの影響が心配されたので、N先生にテストをまかせ、私はKくんの席の横にくくことにした。それもティッシュペーパーを片手にしてである。なぜかと言うとKくんは近頃の子どもにはめずらしく鼻がたれており、それも想像を越える長さにまで伸びるのである。後に、それは反回神経マヒのためであると分かったのだが、とにかくその時は絶えず鼻をかませていなければならなかった。

テストが始まった。Kくんは、例の「億万点取

る”を繰り返しながらも正答を重ね、それもすばやく反応するので私達は驚いた。私は、(ははあ、この子は幼稚園時代に秀才教育を受け、今日はお母さんに”大切なテストだから億万点取るように頑張っていらいっしょい”と言われたんだな)と思った。しかし、答をすばやく見つけ出すのはいいが、それを叫ばずにはいられない様子には閉口した。ほめたり叱ったり、しいっと言ったり口をふさいだり、その上鼻をかませたりで、Kくんが退出する時には二人とも、どっと疲れてしまった。そして、私達は彼のカードに、そっと”落ち着きのない子”と印した。

一連の健診が済んだ後、Kくんの母親と校長先生との教育相談なるものがあったようだが、どんなやりとりがなされたのか、私は知らない。

二 縁あって一緒のクラスに

私は平成元年度、一年を担任することに決まっ

いた。校長先生と担任三名との相談の後、二組の児童カードの入った封筒を渡された。あけてびっくり、なんとその中にはKくんの名前が入っていた。忘れもしない、あの子の名が。

四月六日、入学式の日、私達一年の担任は体育館で新一年生と対面するのを心待ちにしていた。来た来た、まるで紳士、淑女のように着飾った子ども達だ。”さいたさいた”の音楽に合わせて足取りも軽く、自分の席をめざして花道を歩いて来た。私は、殊に黄色い旗の後ろに続く二組の子ども達を見守っていた。

式が始まり、校長先生の挨拶が始まった。

「みなさん、おめでとう」

と、校長先生。するとすかさず、

「ありがとうございます」

という声。何と、あのKくんが起立して叫んでいるではないか。私は苦笑した。(まあ、子どもらしくていいか)などと思いつながら。しかし話が進むにつ

れ、体育館はがやがやしてきた。

「この指はなんという指でしょう、そうですね、お父さん指ですね」

と、校長先生。続いて、

「そんなこと知ってるわい」

とKくん。最初の礼儀正しさはどこへやら、段々、言葉遣いが悪くなり、体を左のお友達の方に倒したり、右のお友達の方へ倒したり、行儀も悪くなった。そして最後まで叫ぶのをやめなかった。私はおもしろがり屋なので笑いが止まらなかったが、先輩の先生達は前代未聞の入学式と言って同情を寄せてくれた。

式後、二組の子ども達は私の後に続いて教室に戻った。あしたから先生と一緒に元気にお勉強しましょう」といった型通りの挨拶をしてから、記念撮影のために校庭へ出た。

昇降口のところでKくんの母親と初めて話をした。

「先生、どうしてあんな風になっちゃったんでしょうか」

と、いささか不安気の様子だったので私はともかくも、

「慣れればだいじょうぶですよ」

と、にこやかに言っておいた。私の目には、興奮してお調子にのっているだけのように見えたので。母親は、続いて反回神経マヒという病気にかかり、赤ちゃん時代に死線をさまよったことがあること、そして鼻が出るのはそのためであることを述べた。

記念撮影も終わり、一人二人と、私と丁寧な挨拶をかわしてお別れしていく中、遠く、赤や黄色のチューリップと共に写真をとっているKくんの姿が目に入った。胸をはって、口をぎゅっと結んで。赤い蝶ネクタイをした彼は、まさに希望に燃えたピカピカの一年生そのものだった。私はまた苦笑いし、そして（あしたからが楽しみ）と心底思った。

三 虹色のなまえ

入学式の翌朝、昇降口の所でまじめそうな顔つきで次々に登校して来る子ども達と「おはよう」の挨拶をかわしている、かわいらしいかっこうをしたKくんが入って来た。

「おはようございます」

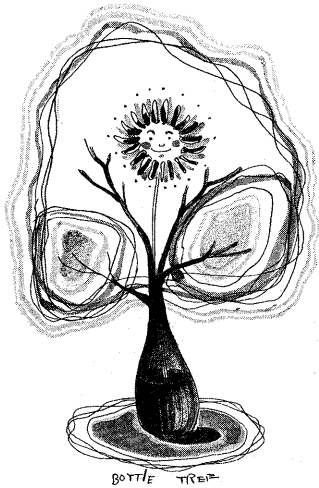
と、礼儀正しくご挨拶ができる。今日はだいじょうぶだな。

さて一時間目。私はまずリラックスさせるために、桜の花型に切っておいた画用紙に、パステルで名前を書かせることにした。リラックスといってもそれは教師の一人よがり過ぎず、初めての課題にみんな緊張ぎみで少し震えるようだった。それでも自分の好きな色のパステルを選んで一生懸命名前を書いていた。

「できた人は先生のところへ持ってきて」

赤、黒、青、黄色……と、突然虹色の桜の花が私の

目の前に現われた。「○○○○○○○○」そこには一文字ごとに色分けしたKくんの名前が書かれていた。書かれていたと言うより、描かれていたと言った方が適切だろうか。やがて二十七枚の桜の花が集まって、大きな桜の木になった。○○○○○○○○、強烈な色彩と共に個性の強さを訴えていた。



四 筆箱は持たせないでください

毎朝、「おはようございます」のかわいらしい挨拶がかわされるようになってどのぐらいたっただろうか。一年生も大分、学校に慣れてきた。絵を描いたり、学校見学をしたり、歌をうたったり、教科書を使つての学習もするようになっていった。

初めて鉛筆を手にした日、私は文字を書く前に手首をやわらかくさせようと、螺旋状の模様を紙に書かせることにした。鉛筆をそおと筆箱から取り出して、みんな真剣にぐるぐるやっている。中には少し不器用な子どももいて、所々にとんがり帽子を作ってしまったりしている。Kくんの方をちらっと見ると同じように一生懸命取り組んでいた。クラスをひと回りする頃には、みんなとても上手になってきた。

「次はこの形を書いてみましょう」と、別の課題を出す。私は、再び一人ひとり指導す

るためにクラスをひと巡りした。すると、どこからともなくトントコ、トントコという音がした。なんとKくんが鉛筆を太鼓のばちのようにして、机をたたいているのだ。私が優しく、

「だめよ」

と注意すると、すぐたたくのをやめるが、またトントコやり出す。飽きてしまったらしい。それはかりではない。どうもよほど太鼓たたきが好きなようで、鏡の前で、陶醉したように、鏡に鉛筆を打ちつけている自分の様子を見つめ出した。注意しようとそばに近づくと、ひゅうっとものすごい速さで席に戻る。で、(今度はちゃんとやるかな)と思って見ていると、なんと鉛筆をかじり出した。

Kくんの鉛筆は、またたく間にかじられてかじられて小さくなっていった。鉛筆は彼にとって太鼓のばちか、食べ物でしかなかった。また、あちこちにばらまいておいて平気だった。そして落とし物箱に○○○○○○と記名されたちびた鉛筆がたまるよ

うになるのに、そう時間はかからなかった。

学校に慣れるに従って、とがった方を上に向けて周りの子にちょっとしたかき出すようになったので危険が伴ってきた。教師は子どもの安全を第一に考えなければならぬ。当時、まだKくんのことをよく理解していなかった私は、悩んだ末に、ともかく連絡帳に「筆箱は特たせないでください。必要な時、そのつど鉛筆は私が貸しますから」と書いた。

五 給食を食べない

一年生も、いよいよおやつ程度の給食から本給食に入った。が、Kくんは給食に興味がないらしく、机に本をひろげていることが多かった。私は、ある程度食べないと残して食べさせる主義だったので、彼はいつもお残りになった。それで、清掃に来てくれる六年生の子がおもしろがってKくんを相手にするようになった。

ある日のこと、Kくんはいつものように放課後、私の机で残した給食を目の前にしていた。彼が手にしていたのはとうもろこしだったが、私はそのままにしておき、六年生と一緒に清掃をしていた。すると、六年のある子どもがこう言った。

「先生、Kくんとうもろこしをわざと床に落している」

と。はいでもはいでも彼が立っている所にとうもろこしが落ちていたので、よく見ていたら食べたふりをして、一粒一粒口からこぼしていると言うのである。私が、

「Kくん！」

と、とがめると、彼は振りかえってニヤッと笑った。そしてばつの悪そうな顔をした。私はKくんの様子から、（これはもう怒れない）とおもわず口元がゆるんでしまった。

彼は、まことに好き嫌いの激しい子であった。その上、食べる量はわずかだった。が、幼児のように

手首などがふにゃつと肉つき、さわるとふにゃふにゃしてやわらかいのが特徴だった。

六 日曜授業参観

一年生の初めての授業参観日、子ども達はもちろんのこと、私もとても緊張し、題材選びと、授業の運びに心をくだいていた。国語では、少し難しいとは思ったが、物語の読解を取り上げた。『花の道』という題であった。くまさんが歩いてきた所に、こぼした種から花が咲いて、花の道ができたということでもすてきなお話で、私は気に入ってしまった。

当日、お父さん、お母さんが期待に胸をふくらませて、さてうちの子はどうかな、という表情で次から次へと教室に入って来る。そのたびに、あっうちのお父さんだ、誰々ちゃんのお母さんだ、と後ろを振りかえる子ども達。そのうち、入りきれなくなっ

て廊下にまで人があふれてしまい、お母さん方独特のがやがやが始まった。その上、六月ということでも少々暑く、子ども達は集中力を欠いてきてしまった。席の座り方もだらつとしており、我が子を見る親の目が敵しくなったのが分かった。

そんな中で、疲れも見せず、はしゃぎきって“はいはい”と手を上げている子がいた。Kくんである。席でさされるのを待っているのが耐えられなくなったのか、通路にまで出て来るしまつ。教師である私としては授業が盛り上がるので喜ぶべきなのだが、何となく、Kくんの独壇場となってしまうて、（これはまずいな）という気もした。案の定、他の子ども達も父母もしらけてしまったようだ。

『花の道』をそれはそれは上手に、情感たっぷり読みきったKくんの姿が今でも思い浮かぶが、と同時に、参観後、“一年二組の先生として、植田先生でだいじょうぶか”という一部の親のクレームが私のところまで届いたという苦い思い出も残って

いる。

七 くつもくつ下もいらぬ

一学期も半ばを過ぎると、気候も大分暑くなつた。運動をすると汗ばむ季節。にもかかわらず、一年二組の子ども達はきちんとくつ下をはいて登校



し、上ばきにはきかえて学校生活を送っていた。ただしKくんだけは違っていた。

Kくんときたら、まず、くつがいらなくなった。

○○○○○○○と記名された上ばきが床に捨て置かれ、誰々ちゃんが、

「先生、Kくんのくつが落ちていました」

と私に言いにくることも多くなった。Kくんは？

と見ると、足を机の上にあげ、くつ下を口にくわえてべろんと伸ばしながら本を読んでいるのが常だった。そのいすにずるっと腰かけた様は、行儀悪さの極致で、もう注意する気もおこらなくなっていた。

続いて彼は、くつ下もぬぎ出した。当時のI小学校の床はビーターだったので、Kくんのペタペタという足音がいつも耳につくようになった。そしてお帰りの会の時、のろろしているKくんのランドセルの中に、私や近くの子どもがくつ下をつっこんであげるのが日課となっていました。後に、彼がLD児と分かった時、やってあげるのではなく、

“待つてあげる”のが大切と知り、この点は大きな反省点だと思った。

八 夏休みのプール

さあ、待ちに待った夏休み。I小のプール指導は前・後期に分かれていて、私は前期の大半の指導にあたっていたが、Kくんは全然現れない。他の子はジョーズごっこなどに興じ、段々黒くなっていくというのに。

八月後半、後期の指導が始まった。夏休みは一年生をうんと成長させた。殊に、背丈がぐんと伸びたようである。ある朝、大いちょうの木の下で受けつけをしていたら、とつぜん、Kくんが“先生”と言って現れた。そして夏休みどこへ行ってどんなだったかということをとりとめなく話し始めた。彼は“あのね、先生”と言って話し出すのがくせだったが、しゃべっているうちに興奮し、聞き手の

反応などおかまいなしになるのであった。自然と私の頭はかき乱されてしまい、“ふうん”とか“そう”などという心ない返事になった。が、それでもしゃべり続けるKくんだった。

さて、プールサイドに全員が集合し、準備体操が始まった。続いて体に水をかけ、静かにプールの中へ。Kくんは、先にも述べたとおり、反回神経マヒという病を持っているため、帽子に赤い＋印がついていた。身体面でも行動面でも要注意児童だったので水泳指導では、全校の教師で見ているという態勢がとられていた。

ピピッ、A先生の笛の音が鋭くプールサイドに響いた。Kくんが規則を破ったのである。またピピッ、さらにピピッ。サッカーだったら、イエローカードで退場というところである。注意されるたびに、ニヤッと笑い、半分はえかかった大人の歯がお日様にあたって白く輝くのが印象的である。が、彼の場合、規則を守らないというより分かっていない

と言った方が適切かもしれない。

基本の泳法指導が終わり、列を作って二十五メートルを泳ぐことになった。みんな、途中で立ったり、水を飲んで顔をなでたりしながら、なんとか向こう岸にたどり着こうと懸命になっている中、またビビッ。なんと反対方向に泳いでいる子がいた。言うまでもなく、その頭には+印がはっきりと見え

*

— つづく —

LD児とは

学習障害 (Learning Disabilities : LD) 児とは、勉強ができない子どもというわけではなく、むしろ学習のし方に独特のものが必要といった子どもを指している。教師が気付かないだけで、一クラスに一人ぐらいいはいる可能性が大きい。

ルールが分からなかったり、人の話をとり違えたりするため、集団行動がとれなかったり、友達から仲間外れにされたりすることもある。そのため二次的な障害が表れ、攻撃的になったり、登校拒否などを起こしたりする。

原因としては微細な脳損傷が疑われており、多動、運動障害なども合わせ持つ。運動面では、とりわけ目と手の協応動作を必要とするなわとび、ルールを必要とするドッジボール等が苦手である。

また、空間認知が悪いため、絵画などを苦手とし、紙の使い方にも偏りが見られる。

一般に知能は普通以上で、中にはBright LDと称する非常に高い者もあり、アインシュタイン、エジソンがこの類に入ると言われている。

(元・東京都小学校教諭)